

Fémina (フェミナ)

Paris : Pierre Lafitte , 1901 – 1956

Hiler p. 308

本誌は1901年2月1日にパリのPierre Lafitte 社より創刊された総合婦人雑誌である。月2回の発行(1日・15日)で、第一次世界大戦中は不定期となるが、1917年に「La vie heureuse」(1902年創刊)を吸収し月刊となった。タイトルが「フェミナ・エ・ヴィ・ウルーズ・レユニ (Fémina et vie heureuse réunies)」となったが、1921年11月号には

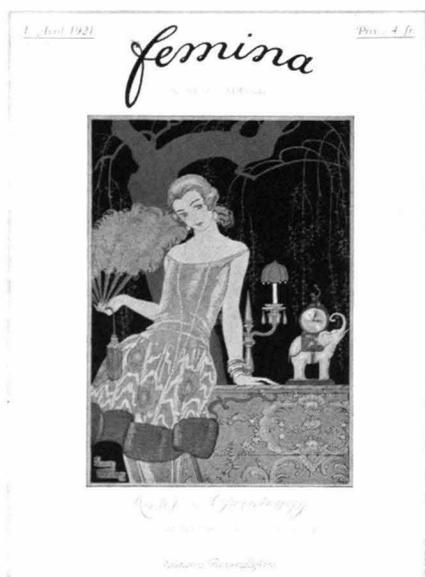


1907年11月1日号 マダム貞奴のインタビュー記事

元のタイトルに戻り、1951年の半ばからは「Fémina : luxe」と副誌名がつく。1945年頃より“N° Hors série”と表示されて合併号や季刊など不定期刊行となり1956年には廃刊となる。

創刊号より、表紙に本格的なグラビア印刷を導入し、内容も写真印刷を多用してイラストと効果的に編集構成されているため、エポックメイキング的な雑誌として評価を得ている。購読者層としては、中・上層のブルジョワ女性が想定されている。モードを中心に、世界の王室や上流階級の婚礼や催し、文学、演劇、舞踏、音楽、スポーツ、宝石・装身具、王宮や庭、インテリア、手芸等、多彩な情報を発信し、特に、1913年頃までの戦前版では、上流階級と大衆、新しい技術の登場と享受による劇的社会変化と人々の生活、また時事的テーマも取り上げて報じているため、社会風俗史研究のよすがとなっている。

1900年代の初頭、パリは、文化芸術の中心地としてさまざまなジャンルが交錯し、創造的エネルギーに満ちあふれる刺激的な時代であった。1873(明治6)年のウィーン万博を起点とする日本への関心が、浮世絵と印象派の出会いなど多方面に及び、1900年のパリ万博では、川上貞奴きだやっこが万国博覧会場の一角に建てられた「ロイ・フラワー劇場」で公演しエキゾチックな麗人ぶりで一大旋風を起こした。「ヤッコ」という香水や室内着、和洋折衷の夜会服「ヤッコ服」が生まれ流行するなど、パリの社交界、モード界が日本の着物や美容に大きな関心をもった。マダム貞奴は万博の翌年には1年余りをヨーロッパ14か国巡演に、また1907年には演劇研修のためパリに滞在し、「フェミナ」11月1日号の表紙を飾り、インタビューを受けている。そのなかで記者は彼女が着ている着物の裾模様が松竹梅であることなどを細かに描写している。演劇や舞踏がモードに与えた影響は大きく、イサドラ・



1921年4月号 ジョルジュ・バルビエ画

ダンカン、ディアギレフ率いるロシア・バレエ団の芸術がモードの流れを大きく変えた。ポール・ポワレはそれらからインスピレーションを得て次々と革新的なスタイルを打ち出した。彼は自分の作品の宣伝用として二つの画集を刊行したが、すべてポショワール手刷りの贅沢なもので、最初の版（1908年刊）には、ポール・イリーブが、続いてジョルジュ・ルパーブが起用された（1911年頃）。ポワレは若く才能ある芸術家を育てることに熱心であった。こうした多くの若い画家や挿絵画家が参画し、20世紀最大のモード誌と評価される「ガゼット・デュ・ボントン」は、1912年にリュシアン・ヴォージェル（1884－1954）によって創刊された。そこにはシャルル・マルタン、ジョルジュ・バルビエ、ポール・イリーブ、ジョルジュ・ルパーブ、アンドレ・マルティなど若く才能のある画家たちが集まり、その才能を開花させていく。ヴォージェルは20歳の時「フェミナ」誌のアート

ディレクターから出発し、「アール・エ・デコラシオン」の主幹を経て、1912年「ガゼット・デュ・ボントン」を創刊する。1920年には「ル・ジャルダン・デ・モード」誌の創刊に携わり、生涯この雑誌の編集にかかわった。そして、1922－1925年にかけてはフランス版「ヴォーグ」のアートディレクターでもあった。このように深くモード界にかかわっていた辣腕編集者ヴォージェルは時代の最先端を察知する鋭い感覚で、1928年には時事問題を扱う報道写真週刊誌「ヴュ」も創刊する。雑誌は時代を反映し、時代を生き抜く「生きもの」である。新しい技術の写真を取り入れて登場した本誌も「ガゼット・デュ・ボントン」や「ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード」のようにポショワールによる豪華な手彩色図版の魅力の現われに影響を受けてであろう、1910年代－1930年代は同時代感覚でモード中心の雑誌へと大きく成長した。表紙および挿絵にルパーブ、バルビエ、マルタンなど、その時代きってのイラストレーターたちを多彩に使う完成度の高い雑誌となっていく。著名なアーティストやイラストレーター、写真家たちが多くかかわっているなかで、日本人で、海外にてその時代の写真にかかわりをもった数少ない写真家の一人である中山岩太はニューヨークから1926年5月パリに渡り、9月に本誌の囑託となる。1927年10月号に作品が確認される。

本館では1938－1945年の期間は所蔵しておらず、以降廃刊となる1956年まで欠号が多い。第二次世界大戦後の1947年、ディオールのニュールック登場からオートクチュールは第2の隆盛の時代となり、本誌もこの時期は有名なデザイナーの作品で編集された専門家向けの高級モード誌であった。20世紀初めに刊行されたモード雑誌のなかでは最も長く続いたが、プレタポルテへの移行に向かう時期とあいまって終りとなる。

（井上節子）